

小川未明・作 嵐の夜 より抜粋

かねちゃんが、家へ帰っても、まだ母さんは帰って来ませんでした。柿の木の下に、敷いた筵の上は、栗の林に遮られて、今は日の光りも蔭って、木の葉や、草の葉の上に風がさわさわと鳴り、にわかには、いつの間にやら大空に白雲がちらばったのであります。その内に天地は暗くなって、風が烈しくなって、栗の樹や、柿の木や、松林に鳴る音高く、萩の枝などは、もまれにもまれて、見渡すかぎり田畑は一面に白っぽく、稲や、芋の葉のひらひらとなびくのであります。

かねちゃんは、小窓の内から外の方を見て、母さんが帰って来ないかと見ていますと、木の葉が空に吹かれて、舞い上ってはちらちらと降るようには落ちるのであります。

そのうちに雨も加わって、木の枝の折れる音やら、海の波の音がごうごうと吼えるように、

今にも自分の家が吹き飛ばされそうになりました。かねちゃんは、

「父さん、父さん早く帰って来て頂戴よ——くしんくしん。」……と泣き出しました。すると雨風に打たれて、圃の細道を走って、濡鼠のようになって入って来たのは母親であります。

「かねちゃんかねちゃん今帰って来てよ。」

と、表戸を開けますと颯と風が中に吹き込んで、木の葉が座敷の中まで飛び込みました。

「まあ、ひどい風なことねえ。」と行って、泣いているかねちゃんを自分の傍に引き寄せて、妾の身体は濡れていてよ、と温かい唇をかねちゃんの薔薇色の頬辺にあてて、

「お父さんはどうしたでしょう……妾浜まで行って見て来るから従順しうしておいでよ、よじきにね、晩方までには帰って来るから。……さあさあ、泣かんで、お留守居しておくれよ。ああ、心配でならないこと。沖はどないに荒れているか……浜へ行ったら消息があるかもしれない。……父さんを、かねちゃん……かねちゃん、見に行つて来てよ。」

泣くかねちゃんを家に残して、母さんは、またも雨風の中に駆け出しました。

破れた小窓の障子をブーム、ブームと風が鳴らして、夜はぼったりと暮れてしまいましたけれど、母さんも、父さんも帰って来ません……かねちゃんは、暗がりのまんまで、懐裡にはなにも知らずに眠っているまりを抱いたまましくしくと泣きあかしています。ただ物凄い風の音と、木の葉がぱらぱらと窓や、壁板に当って散り敷く音を聞くばかりで、誰とて自分の家を訪ねて呉れるものがありません。かねちゃんは、泣きあぐんで、少し気が労れて、火もない囲炉裏の傍で、まりの温かいむくむくとした毛の中に可愛らしい頬を埋めて、居眠りをしたのであります。

2016年9月10日作成

青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。